

指出（コーディネーター）：皆様、よろしくお願ひいたします。第1分科会のコーディネーターを務めさせていただきます、『ソトコト』編集長の指出と申します。本日は荒川町長、渡辺市長とご一緒させていただけるということで、大変楽しみにしております。本日のテーマは「二地域居住」と「関係人口」です。人口が減少している地域の中で、担い手をどのように確保するか、また移住・定住に結びつくような施策として、どのように弾みをつけていくかなど、お話ができればと考えております。

最初にウォーミングアップとして、私自身が二地域居住を4年間実践しておりますので、地域居住者がどのような気持ちで成長していくか、家族との生活の様子をスライドを用いて5分ほどお話しさせていただきます。

私が27年間制作しているメディア『ソトコト』でも取り上げておますが、「関係人口」は観光以上・移住未満の第三の人口として、現在全国で2,263万人を超えたと言われています。最近出版いたしました著書『オン・ザ・ロード二拠点思考』でも触れておりますが、私は地域を広げていく上で、この「二拠点思考」という言葉を大切にしています。先ほどご紹介いただいた「かづコトアカデミー」の開催地はきりたんぽ発祥の鹿角市ですが、首都圏の若い人たちがここから二拠点を始めているケースもあります。「二拠点思考」とは、「自分の住む地域と思いを寄せる地域を頭の中に複数持つこと」です。一つの基準ではない、複眼的な物の捉え方が身につくと、関係人口の裾野も広がります。

ここからは私の神戸での暮らしについてです。私は東京と神戸の二拠点を行っており、家族は神戸に暮らしています。「教育移住」という形であり、積極的な二拠点というよりは受動的な二拠点と言えます。2022年から始めて4年目になりました。神戸にいる時は、「ソトコト編集長」や「サステナビリティの専門家」という肩書きは一切つきません。「指出家のパパ」や「指出君のお父さん」と言われています。お付き合いしている方々も、例えばスライド左側の青いTシャツの方はコミュニティデザイナーの山崎亮さんですが、ご近所にお住まいですので、家族ぐるみのお付き合いが広がっています。神戸では、公園NPOの理事を務めたり、三宮の「サンキタ広場」の利活用審査員を務めたりと、割と街の中に入していくような依頼を受けることが多いです。これは東京にいる時とはだいぶ異なります。また、JR西日本様からのご依

頼で開催した高架下の酒場プロジェクトでは、多くの方が集まり、老若男女が楽しんでくれる場ができ、良かったと感じています。

次は東京での活動です。母校である上智大学のホームカミングデー実行委員長を務めており、250名を超える学生が実行委員として活動してくれています。これは「ソフトコト編集長」としてお引き受けしています。群馬県庁31階のリノベーションエリアのプロデュースや、サステナビリティに関するアニメの監修なども、「ソフトコト」やサステナビリティの文脈で受けています。また、長野県根羽村の大久保村長とご一緒させていただき、間伐材の杉から釣り糸を作ろうというプロジェクトをゆっくりと進めています。こうした活動もサステナビリティに繋がるため、肩書きのある仕事として行っています。

このように東京と神戸を行き来して4年目になりますが、二地域居住の良さは、「東京にいる自分」と「神戸にいる自分」を意外と違う存在として見ていられる点にあります。東京で暮らす多くの人々は、私も含め、「なりたかった自分」になりきれていない場合が多いのではないでしょうか。そうした方々が、ある地域にもう一つ自分を作ることで、自分自身を補完し合うことができます。つまり、「なりたかった自分」や「なりたかった家族との生活」を重ね合わせることで、自分の中で幸せの度合いが増していくのです。単身ではなく、家族として、また会社の代表として二拠点を実践してきましたが、結果的に大変良かったと感じています。この「二拠点思考」を考える上で、「ウェルビーイング」という言葉を入れています。人がより幸せな状態であるために、二地域居住や関係人口の動きが広がると良いと、この1,000日間ほどの東京・神戸の行き来で改めて認識しました。「関係案内所」「ご機嫌な状態」「中長期的な幸せ」「ここに安心感」、これらはどれも、二拠点をすることで得られた、自分自身や家族、社会に対する新しい満足感です。僭越ながら、個人的な話を含めてお話しさせていただきました。

それではここからは、五城目町の荒川滋町長と佐渡市の渡辺竜五市長に、それぞれの取り組みについて10分程度でお話しいただきたいと思います。まずは荒川町長、よろしくお願いいたします。

【事例発表：秋田県五城目町】

荒川（五城目町長）：皆様こんにちは。秋田県五城目町長の荒川と申します。本日はこのような機会を設けていただき、私たちの町の取り組みをお話しできることに感謝申し上げます。本日のご縁を大切にし、これからも町のために尽くしていきたいという思いを新たにしております。所要時間は10分とのことですが、気合を入れすぎてスライドが35枚あります。1枚あたり17秒ペースで進まなければなりませんが、制限時間内で終わるよう努めます。

まず自己紹介です。私は現在58歳、五城目町に生まれ育ちました。2016年から町議会議員として地域に関わり、昨年12月に3期目の途中で辞職、今年2月に町長に就任したばかりの、まだ8ヶ月余りの新米町長です。家族は7人おり、家族との時間を大切にしながら過ごしてまいりました。人のほかに、2匹の猫も一緒に生活しております。今年1月には初孫にも恵まれました。1999年にヒットした山形県出身の歌手・大泉逸郎さんの『孫』という曲の冒頭、「なんでこんなに可愛いのかよ」という歌詞の通りで、毎日元気をもらっております。

五城目町の紹介になります。当町は秋田県の中央部に位置し、八郎潟干拓地の東側に広がる自然豊かな町です。秋田市から車で50分程度のため、通勤通学する方も多いいらっしゃいます。面積は214平方キロメートル、その8割が森林です。古くから秋田中央部から北部へ通ずる交通の要衝として、商業と林業で栄えてまいりました。町のシンボルである「森山（もりやま）」は、標高325メートルと高くはありませんが、平野から突如そびえる独立峰であり、心の拠り所となっているランドマークです。山頂からの眺めは素晴らしい、南には山形県境の鳥海山や秋田市街、西には大潟村の広大な干拓地と男鹿半島、北には世界自然遺産の白神山地、天気が良ければ青森県の岩木山も見えます。東には太平山と、県内ほぼ全域を見渡すことができます。特に5月の田植えシーズン、平野や大潟村が一面水鏡となり、日本海に夕日が沈む風景は、全国の旅行誌でも取り上げられる私たちの宝です。私はこれまでの4度の選挙において、告示日の朝、夜明け前に一人で登り無事を祈るのがルーティンとなっており、私にとっては聖地です。ただ現在はクマの問題があり、夜明け前の一人歩きは厳しい状況です。

また、当町には530年続く「五城目朝市」がございます。530年目の節目に当たる今週、11月1日・2日には当町で「全国朝市サミット」が行われます。翌日には「朝市きのこ祭り」「全国朝市特産市」も開催されます。今回のサミットと合わせ、1週間に二度の全国サミットを経験できる私はラッキーな男だと思っております。ぜひ五城目朝市を覚えておいてください。1989年には東京都千代田区と姉妹都市提携を結び、都市と地方の交流という縁を育んでまいりました。今年の7月に千代田区役所を訪問し、樋口区長と写真を撮りました。地方の小さな町が日本のど真ん中である千代田区と繋がっていることは、大変重要で貴重なことです。このご縁はこれからも大切に育んでいきたいと思います。

さて、今日の本題である五城目町の取り組み、特に関係人口をいかに増やすかについてお話しします。当町の人口は約7,600人、1960年の2万人をピークに減少の一途をたどっています。推計では2050年には3,500人台まで減少すると予測されています。このままではまずいと、約20年前に周辺2町との合併協議を進めましたが、2005年の平成の大合併は実現に至らず、単独立町を選択しました。2011年、企業の存続に不可欠として初めて「企業誘致係」を設置し、可能性について調査を行いました。しかし、「企業が進出できる整備された土地がない」「高齢者が多く労働者確保が難しい」「他地域と比べて本社から遠く不便」という厳しい現実を突きつけられました。

そこで、他の自治体と同じ土俵ではなく、「ご縁」を軸にした企業誘致を進めることとしました。2013年3月、今から12年前に山間部の馬場目小学校が閉校となり、築13年のピカピカの新しい廃校が誕生しました。町ではこれを活用し、同年10月に地域活性化支援センター「BABAME BASE（ババメベース）」としてレンタルオフィスを開業しました。同時に、町職員による「ご縁探し・ご縁づくり」として、姉妹都市である千代田区での営業活動や、課題解決のためのイベント開催に奔走しました。

その結果、BABAME BASEに入居してくれる企業が現れ始めました。そして、東京・千代田区で活躍していた若手起業家、丑田俊輔さんが家族で五城目に移住し、入居することになりました。当時、町の担当職員が彼を五城目に連れてきて初めて会わせた町民が私であり、私が彼と初めて会った町民となりました。そのバトンを受け、私も

他の町民へご縁を繋いでいきました。彼は移住早々、祭りにも積極的に参加し、町に溶け込もうと一生懸命でした。2014年には地域おこし協力隊3名を採用し、町民との関係づくりや来町者を町民に繋げるミッションを与え、見事に活動してくれました。彼らは**BABAME BASE**を拠点に、2015年には古民家改修プロジェクト「シェアビレッジ」や、朝市に若者を呼び込む「ごじょうめ朝市plus+」などを積極的に行ってくれました。これにより、町にいなかった属性、価値観、年齢、ライフスタイルの多様な人々を受け入れることで、元々の町民もポジティブな刺激を受け、自ら起業、朝市出店、自主イベント開催などに挑戦し始めました。カフェ、画廊、出張型理髪店、花の技術を活かした教室などを始める町民が現れています。

町ではこうした流れに乗り遅れないよう、挑戦する町民を応援する補助制度を構築し、金融機関や商工会と連携して支援しています。教育事業においても、住民参加の小学校改築「越える学校プロジェクト」、子供以外の住民も赤ちゃんから100歳まで受け入れる「みんなの学校」、町外の小中学生を短期間受け入れる「教育留学」などを展開し、全国から注目を集めており、教育分野でもご縁が生まれています。

BABAME BASEには多くの視察が訪れ、ご縁の拠点となっています。ご縁ができた方々として、大手IT企業勤務で総務省DXアドバイザーの橋本さん、東大研究員の高橋さん、内科医として勤務しながら賑わいづくりに貢献している漆畠先生、国際教養大学准教授の工藤先生などがいらっしゃいます。

これまでの成果として、移住者は89名と決して多くはありませんが、五城目町にとっては大きな成果です。起業した方もおり、**BABAME BASE**入居は44社、来館者は年間約5,000人、教育留学は約54名、「みんなの学校」の開催なども成果です。まとめとして、行政側からは「単独立町ゆえの課題からご縁を軸にした誘致へ」「千代田区との提携がきっかけ」「廃校活用」「地域おこし協力隊の活用」「職員の積極的な行動」「ご縁のつなぎ役」が挙げられます。地域と町民の様子としては、「多様性を尊重する文化（朝市の影響）」「挑戦を受け入れる空気」「メディア露出の増加」「二拠点生活者による貢献」が見られます。

これから私が取り組むこととして、ご縁探しの若手職員育成、若手職員の出張機会の増加、「挑戦したい」を応援する支援制度・体制の整備を公約に掲げています。五城

目町に住む方々が主役のまちづくりを進め、ご縁を繋げて人と企業に選んでいただけ
る町、人口は減っても幸福度が高く住みやすい町を目指してまいります。課題は多い
ですが、私は五城目町が大好きですので、やりがいを感じながら進めていきたいと思
います。時間が過ぎてしまい申し訳ありません。ご清聴ありがとうございました。

指出：荒川町長、ありがとうございました。五城目町のプロセスデザイン、関係人口
と二拠点がどう広がっていったかが大変よく分かるプレゼンテーションでした。それ
では、佐渡市長の渡辺様、お願ひいたします。

【事例発表：新潟県佐渡市】

渡辺（佐渡市長）：新潟県佐渡市の渡辺でございます。島だからこそ困ったことがあります、島だからこそ解決の目標が早く見えるという特徴があります。人口動態も、かつては東京の23年先、全国の17～18年先を行っていましたが、コロナ禍を経て全国の減少速度が早まり、差が縮まったように感じます。多くの課題の中で取り組んでまいりましたので、その辺りをお伝えできればと思います。

佐渡島は日本海側に位置しますが、北緯38度線上にありながら暖流に囲まれているため、リンゴからレモンまで取れる場所になっています。江戸時代から金山が発展し、当時は佐渡だけで8万人が住んでいたと言われています。当時の日本の人口からすれば政令指定都市並みです。昭和23年頃の最大人口は約14万人でしたが、現在は4万7千人ほどになっており、約3分の1に減少しています。昨年は「朱鷺と暮らす郷」というお米が日本一高い値段になったり、世界文化遺産登録の影響でテレビ露出が増え、観光客で行列ができるなど良い効果も出ていますが、やはり人口減少問題は非常に大きいです。

社会動態のデータを見ると、佐渡には大学がないため（専門学校はありますが）、22歳以下の層は一旦島外へ出てしまいます。しかし、22歳以降から少しづつ戻り始め、40代以降になると転入が増える傾向にあります。令和4年には転入者が600名になりました。これには背景があります。「ADDress」さんなどとの二地域居住の取り組みや、有人国境離島法という「人が住める離島にしよう」という法律による雇用対策で

す。創業の場合は 600 万円の 3 分の 2、事業拡大の場合は 1,600 万円の 3 分の 2 を補助する制度があります。私は令和 2 年に市長に就任しましたが、当初から人口減少は止まらないと考えていました。これを市民に言うと叱られますが、市長として嘘はつけません。私の頭の中にあったのは、大橋巨泉さんの話です。晩年、冬はハワイ、夏はカナダで過ごされていました。「お金持ちだからできるんだな」と思っていましたが、一方で若い頃、私がスキーをしていた時、夏は東京、冬はスキー場で数ヶ月アルバイトをしている人たちがいました。これからは日本全体で人口が減るため、取り合っても仕方がない。しかし、「アドレス」のようなケースはあるのではないか。そのためには働く場所が必要です。そこで「佐渡で起業を失敗しない島」という戦略でビジネスコンテストを開き、年間 10 件ほどの新規起業が入ってくるようになりました。特にコロナ禍では、サービス業が多い佐渡に IT 系企業を呼び込みたいと考えました。IT 企業が順調に入り、中には東証に上場するほど伸びている企業もあります。そのバックボーンとして、総務省にお願いして島内に光回線を整備したことも大きいです。これが令和 4 年の 600 名の転入者増に繋がっていると思います。

一方で、労働者不足の問題は佐渡でも深刻です。観光産業において、若い人は朝早く、土日や夜遅い仕事を嫌がります。さらに日本海側の特徴として、冬（2 月）の観光客は夏（8 月）の 20% 以下に落ち込んでしまいます。船が欠航する心配や、飛行機の就航率の問題もあり、冬はどうしても客足が落ちます。これでは通年雇用ができず、事業者の経営を圧迫します。かつては「出稼ぎ」をしていましたが、今はそんな時代ではありません。

この「季節変動」と「労働者不足」が大きな課題です。IT 企業であれば冬でも関係ありませんので 400 人ほどの移住者が来ていますが、「特定居住促進計画」を作成しました。これは都市計画区域内、つまり島の中心部で移住定住に力を入れるというものです。移住者には、田舎に住みたい人と、利便性の高い中心部に住みたい企業勤めの人、二つのパターンがあります。

その中で「二地域居住」の取り組みとして、湯沢町（苗場）との連携を進めています。「冬の働き場所」であるスキー場と、「夏の働き場所」である佐渡を行き来できる仕組みです。また、通常の 1 週間・10 日程度の二地域居住も推進しています。お

店ごと空き店舗を活用して人が動く仕組みや、すぐに住める空き家の掘り起こしを進めています。「特定地域づくり事業協同組合」の枠組みを活用し、原則認められない区域外への派遣を佐渡と湯沢などで行うことで年間雇用ができないか、出稼ぎという形態を取らずにできないかと、国とも相談しながら進めています。

最後に「ふるさと留学」として、保育園から高校までの留学を受け入れています。特に保育園留学は人気で、海外からも来ています。短期かもしれません、佐渡に住んでみるという形を作ることが重要です。棚田や伝統芸能（能や鬼太鼓）を活用し、例えば佐渡で働いて土日は農業や能をやる、といった提案も含め、取り組んでいきたいと考えています。ありがとうございました。

【ディスカッション】

指出：ありがとうございました。時間が少なくて恐縮ですが、それぞれのご発表をご覧になられてどう感じられたかお聞きします。まずは荒川町長、いかがでしたか？

荒川：何点かお聞きしたいことがあります。伝統芸能に携わるということは非常に重要なことだと思いますが、どのような取り組みをしているのか。また、移住されてくる方々の仕事の内容や働き先はどのようなものなのか、教えてください。

渡辺：祭りへの参加については、佐渡には200以上の集落があり、住んだ場所の祭りに移住者が参加するというのが一つのパターンです。また、企業として地域の大きなイベントや祭りに参加してもらうケースもあります。今徹底的にやりたいと思っているのは大学との連携です。大学生に来ていただき、祭りを積極的に担ってもらう。学生は毎年変わりますが、うまくいっているケースもあります。「祭りは自分たちがやるものだ」という意識がまだ田舎にはありますが、「諦めて外の人を入れろ、入れなければ守れないぞ」と話しています。働き場所については、コロナ禍ではIT系が多かったです。佐渡の若者が佐渡でIT系に勤められる形を作りました。今は世界遺産登録のお客様が増えているため、空き家を改修した宿泊施設や古民家の宿、飲食店なども増えてきています。

指出：佐渡の虫崎などは関係人口が増えていて有名なところですね。では逆に、渡辺市長から荒川町長の発表に対してご感想などはありますか？

渡辺：職員の皆さんが千代田区さんと交流されているのが一つの切り口だと感じました。我々も東京の方と交流しますが、あえて大きな自治体と組んでもなかなか成果が出せないこともあります。その千代田区との交流における職員さんの取り組みについて教えていただければと思います。

荒川：14年ほど前になりますが、東京・千代田区のレンタルオフィス施設（ちよだプラットフォームスクウェア）に、五城目のサテライト事務所のような形で一室を借りました。そこに入居している企業との繋がりがぐっと深まったことが大きいです。今まで企業誘致というと、50人、100人規模の工場というイメージがありましたが、それだけではない、小さな拠点の誘致も重要だと気づき始めました。14年前の取り組みが今につながっていると思います。

指出：荒川町長、ありがとうございました。先ほどのスライドに出てきた丑田さんや、昨日藤里町でお会いした柳澤さんなど、偶然にもご縁がつながって活躍されています。ここからはお二人に共通の質問をさせてください。二地域居住や関係人口が広がっていくメリットは何だとお考えでしょうか。例えば移住と比べていかがでしょう。

荒川：二地域居住の手前のような例ですが、「教育留学」で都会の家族や子供が短期間でも五城目で過ごすことで、気持ちの上で二地域に拠点がシフトしていく例があります。これは非常に大切で、いつか五城目に来てくれて関係が深まっていくことにつながります。60年前の2万人から7,000人台まで減っている中、人がいなくなれば経済活動も進みません。外から来てくれるつながりのある方々とのご縁は、これからも力を入れていかなければなりません。そして、そうした人から刺激を受けた元々の町民の「やる気スイッチ」を入れてくれるという点を見ていますので、非常に大切だと思っています。

指出：お互いが写し鏡になるような関係性ですね。渡辺市長はいかがでしょうか。

渡辺：私は「佐渡別荘化計画」という考え方で、佐渡島の空き家を撲滅したいと考えています。佐渡には金山時代の名残で、農村に大きな家がたくさんあります。今は高齢者が一人で住んでいるような家も多いですが、これらは財産です。これを維持するには、移住者だけでは日本全体で人口が減っているため無理だと思います。二地域居住であれば、一定程度その地域の形を守ることができます。また、彼らがお話しすることによって、移住定住につながることもあります。自治体にとって情報発信ソースをどう捉えるかが重要です。「佐渡を知ってるでしょ」と言っても東京ではそうでもありません。彼らが発信ツールにもなります。そして、長くお付き合いしていくと、幼稚園で来た子が30代、40代になって子供を連れて戻ってきます。住民にならなくても様々な効果があるので、観光も含めて「3日間の二地域居住」「暮らすように旅をする」として、将来的に移住・定住や関係人口になる仕掛けができれば幸せですね。

指出：長いスパンで二地域や関係人口を考えておられるのですね。逆に、地域にいる皆さんから見て、二地域居住や関係人口の人たちが来ることに対して距離感を感じたり、あるいはうまくいっているエピソードなどあれば教えてください。

荒川：生々しい話になりますが、町民全員がウェルカムかというとそうでもなく、外から来る若者を非常に警戒している方々も確かにいます。でも実際彼らと接していると、彼らの力を借りなければ五城目町の将来はないと思っています。排他的な考えを持っている方々に、いかに彼らの素晴らしさを伝えていくかが大きな課題であり、絶対に進めていきたいと思っています。中には「彼らに乗っ取られるぞ」という言葉を聞いたこともありますが、一人ひとりに「彼らの力を借りなければこの町はやっていけない」と伝えていきたいと思っています。

渡辺：我々も島ですので排他的なところはありますが、江戸時代から多くの人が来ていたので多少は良いのかもしれません。ただ、排他的なトラブルは、かえって移住の場合の方が多いです。移住して地域と相性が合わなかったりというトラブルは結構あり、「市長なんとかしてくれ」と言われますが、住んでしまうとなかなかそうはいきません。逆に、二地域居住から始めるうまくいきます。例えば、廃校を使った酒造りの学校に外国人が大勢来ていますが、最初は外国人が地域で飲むことを警戒してい

ましたが、慣れてくるとそれが普通になります。「慣れ」が風景を変えていくのだと実感しました。二地域居住から始めて、うまくいったら移住という形に繋げられるのが良い点だと思っています。

指出：外国人の方も、地元の方が受け入れてくれるようになっていくのですね。

荒川：コロナも落ち着きインバウンドが増えていますが、秋田県は東北6県でも訪問数が少ないです。秋田港には豪華客船が来たり、台湾との直行便もありますが、五城目町にはインバウンドブームは遠い国の話のように感じます。これから数年後には多くの外国人が訪れて、「オーバーツーリズムで困るな」と言ってみたいのですが、ポテンシャルはあると思います。

指出：少しテクニカルな質問です。大都市の行政や首都圏の企業との連携の始め方について、お二人はどうお考えですか？

荒川：入り方は36年前のことなので私の管轄外ですが、交流の内容としては、お互いの住民体育祭や運動会に参加したり、防災に関する行事に行き来したり、子供の双方向交流を行ってきました。災害の際には助け合うなど、小さな積み重ねが、小さな町と日本の真ん中にある千代田区との搖るぎない繋がりになっていると感じています。

指出：災害ボランティアの方なども足を運ばれていますね。渡辺市長はいかがですか。

渡辺：我々も埼玉県入間市や東京都国分寺市と姉妹都市を結んでおり、大田区さんなどとも連携していますが、自治体連携は本腰を入れないと形になりにくい側面があります。どちらかと言えば、今は企業さん、例えばNTTさんやソフトバンクさんなどと組んで地域づくりを進める方が進んでいると感じます。

指出：お祭りや伝統工芸など、長いスパンでの取り組みに、二地域居住者や関係人口は向いていると思われますか？単発のアルバイトには効果があると思いますが。

荒川：先ほど紹介した3名の地域おこし協力隊は、任期終了後も町に住み続けてくれました（1名は秋田市に移りました）。「今だけでしょう」と最初は思われました

が、残って賑わいづくりに貢献してくれており、伝統芸能やお祭りの継承にも大きな力になっています。

渡辺：逆に、二地域居住の方が効果的な部分も多くあると思います。住むとなると、地域コミュニティなど様々な面倒なこともありますが、二地域居住ならそこまで考えずに素晴らしいお祭りに参加できます。地元の人に「ありがとう、来年も来てね」と言われる。この繰り返しで、大学生が能を学び、親になって子供を連れてくるというサイクルができます。移住者でなくても良い面があると思います。

指出：確かにそれは感じられますね。最後の質問ですが、来年度以降始まる「ふるさと住民登録制度」への期待感について教えてください。

荒川：非常に大きな期待を持っています。五城目町の基幹産業である農業は後継者不足の危機にあります。5年後、10年後どうなるかという中で、例えば「半農半X」のような取り組みを、この制度を活用して進めれば、まだまだ可能性があると感じています。

渡辺：総務省さんにお願いしたいのは、東京や大阪で徹底的にPRしてほしいということです。自治体からでは届きにくい層に、制度を知ってもらい、「自治体に行こうよ」という機運を作ってほしい。また、「マッチボックス」という短期バイトアプリを活用し、リゾートバイトのように「3日働いて3日遊ぶ」といった新しい形態も成り立つ可能性があります。多くの人に知ってもらい参加してもらうことに期待しています。

【質疑応答】

指出：ありがとうございます。もっとお聞きしたいのですが、会場とオンラインの皆様からのご質問を受けたいと思います。会場の皆様、いかがでしょうか。

質問者：渡辺市長にお伺いしたいのですが、湯沢のスキー場との連携について、具体的なアプローチを詳しく教えていただけますか。

渡辺：人材確保、特に観光産業において、冬に雇用を切らざるを得ず良い人材が逃げてしまうという悩みがありました。若い人にとって魅力ある産業にならなかつたのです。湯沢町の方も同様に「4月で切らなきやいけないから翌年来ない」と言っており、我々は夏、湯沢は冬が繁忙期なので、連携すればぴったりではないかという話から始まりました。ただし、「出稼ぎ」という形にはしたくありません。変なアパートを探して自分で何とかしろというの止めようと。一つの雇用で、年間を通じて安定した給与を出し、リゾート感覚で行き来できる形にしたい。例えば、特定地域づくり事業協同組合で2市町村が連携して雇い入れ、年間報酬をきっちり払う。お店ごと空き家を活用してお互いに拠点を作る。コストを下げながら、関係者や国交省、内閣府などにお願いしながら進めています。日本海側の海と山で連携できる可能性があると思っています。

荒川（五城目町長）：今の湯沢との取り組み、非常に羨ましいなと思って聞いておりました。大いに参考にさせていただきます。

質問者：渡辺市長にお伺いします。多様な交流を展開する上でマッチング機能が重要だと思いますが、その機能は市役所が受け持っているのか、どこかに委託しているのか。また、市役所の場合は専門の部局を設置しているのでしょうか。

渡辺：これは私の一丁目一番地として、令和3年から「移住交流推進課」を作り、専門の課長を置いて取り組んでいます。以前は民間に委託していましたが、行政として国の施策を取り入れ、例えば住宅問題などに踏み込むには、市役所直営である必要があります。「保証人がいない」問題などに対し、市が借り上げて貸し出すといった施策をワンセットで考えるためです。委託だと情報が伝わらないこともあり、2年ほど前から直営に変えました。港にあるコワーキングスペースに移住相談窓口を作り、データを一元化しています。また、渋谷の「キューズ」に「窓」という佐渡と直結できるシステムを作ったり、連携大学への旅費支援や専用拠点の整備など、投資もしながら多方面で取り組んでいます。

【結び】

指出：ありがとうございます。お時間になりましたので、最後にお二人から一言ずつメッセージをお願いいたします。

荒川：本日はこのような機会を与えていただきありがとうございます。五城目町の地方創生事業はまだまだ途上です。今日の佐渡市長のお話を参考に、これからも取り組みを進めていきたいと思います。ありがとうございました。

渡辺：ありがとうございました。全てがうまくいっているわけではなく、失敗もたくさんあります。職員や移住定住者と一緒に考えながら、民間企業を徹底的に「こき使う」と言いますか（笑）、「佐渡市長の被害者の会」ができているようですが、島ゆえに効果も見えやすいので、持続可能な島になるよう頑張っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

指出：荒川町長、渡辺市長、本当にありがとうございました。改めまして、お二方に大きな拍手をお願いいたします。